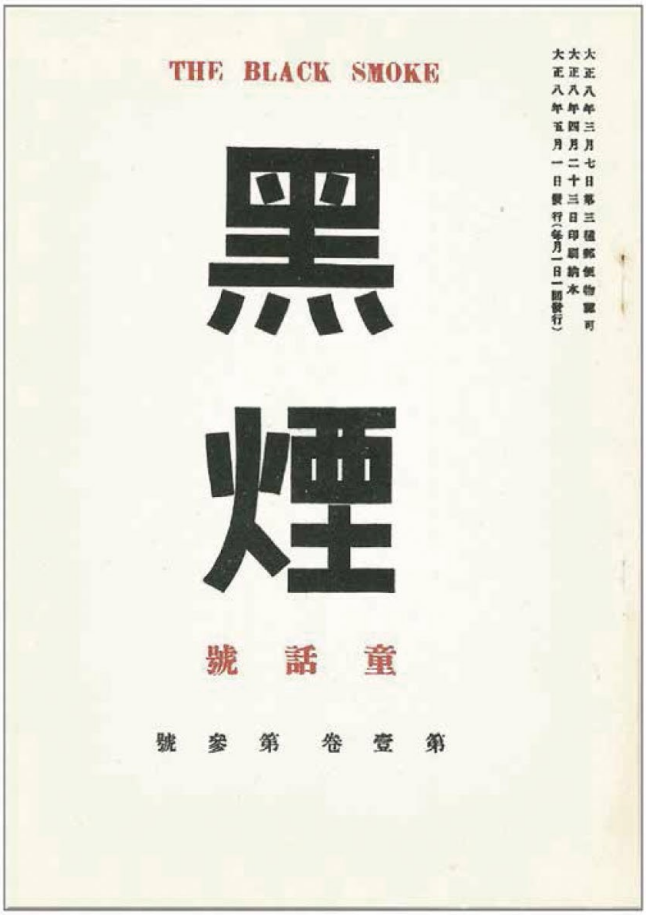
雑誌「黒煙」



大正８年（1919）３月、雑誌「黒煙」が創刊されました。左の写真は、同年５月発行の第３号の表紙です。「童話号」と題され、小川未明「犬と人と花」、丹潔「縄の話」、角谷伊作「盲ひし小鳥」、藤井眞澄「雪山童子」、坪田譲治「村へ帰る心」の５篇が掲載されています。第２号の「紹介」記事では、未明の小説集『血で描いた画』、童話集『星の世界から』が刊行されたことを紹介したのち、次号「『童話号』には此国に今まで一つもなかつた最も芸術的な最も思想的な童話小説童話劇を満載する」と予告しています。

「犬と人と花」は次のような童話です。町はずれの寺に、和尚様と赤犬が住んでいました。和尚様は毎日お経をあげ、犬は熱心にそれを聞いていました。和尚様は、赤犬に「私は仏さまに、おまえが徳のある人間に生まれ変わるようお願いした。三十年後にはこの娑婆に出てくるだろう」と言います。三十年たち、五十年たち、七十年がたちました。ある村にいつも笑っているじいさんがいました。しかし、そのじいさんも死んでしまいます。また二十年、三十年がたちました。じいさんの墓のそばに植えた桜の木は、毎年花をつけました。

雑誌「黒煙」は、明治 41 年（1908）に小川未明の提唱によって生まれた新ロマンチシズムの研究団体〈青鳥会〉に集まったメンバー（新井紀一、坪田譲治、藤井眞澄、浜田廣介ら）を中心に作られた同人誌です。「黒煙」の命名は小川未明によると言われていますが、具体的に創刊を主導したのは坪田譲治と藤井眞澄の二人だったようです。藤井眞澄の言葉によると「未明は顧問、青鳥会は後援者」という関係でした。当初、「黒煙」は「犬と人と花」に見られる芸術的童話の掲載を視野に入れた雑誌として出発しますが、編集の一端を担う坪田譲治が東京を去ってからは、藤井眞澄が「黒煙」をリードし、労働文学雑誌になっていきます。

新時代の到来を表す「黒煙」という誌名には、都会からもうもうとあがる黒煙の下で苦しい生活にあえぐ人々の暮らしを見つめ、社会の改造をはかろうとする未明の思いがこめられています。未明は、「黒煙」誌上に上記童話のほか、次の小説を載せ、大正９年（1920）２月、本誌が全 10 冊で廃刊されるまで、この雑誌を見守りつづけました。「弟」（創刊号）、「閉つた耳」（大正８年４月）、「顔」（大正８年 10 月）、「彼の死」（大正９年１月）。

第１次世界大戦がおわった大正７年（1918）、鈴木三重吉が主宰する童話雑誌「赤い鳥」が創刊され、大正後半の童話隆盛の時代が始まります。この年の終わりに長女を病気で亡くした未明は、刊行を準備していた童話集『星の世界から』（大正７年 12 月）を長女の霊前に捧げ、童話執筆に力を注ぐようになりますが、一方で、社会改造に強い思いをもち、小説世界では都会生活をする人々の暮らしを通して社会のひずみを描きつづけます。ロシア革命や日本の米騒動を契機にひろがった、民衆を政治の主体に押し上げようとする社会改造の機運を背負い、未明はその先頭に立って小説を書き、同時に現実の重みを乗り越えていく光明を童話に示しました。「黒煙」は、そうした未明の夢を託した雑誌です。

（参考文献『黒煙復刻版別冊』日本近代文学研究所、昭和 38 年（1963）３月）

〒943-0835 新潟県上越市本城町8番30号（高田図書館内）　Tel：025−523−1083　E-Mail：mimei@city.joetsu.lg.jp